

春秋蒼弁白雄著 拙堂老人補

誹諧寂琴 全三冊

江都製本所 野村新兵衛



東山居士卯春俳諧寂琴



うゝのたゞさうゝと推乃たの由たか

かゝれそあまの 梅堂八三

かゝれそあまの 梅堂八三

此後... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

敬道... 敬道... 敬道... 敬道...

家業と母と
たつた母の病と

治るは母も父も又水も

茶もくは心も母も

きこ邪り始り

じつと後の大いそり

么乃をけらほり後り

方と校りて母の病も

くし醫とけり醫師り

何事此世之章に及ぶ如く哉
しるすにいとむねなる
可樂之友よこゝろに論
しむるに我を海に心は

事と還る可也

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

如渡齋主人

序

可解不可解之一語不啻我詩
之論可以論誦諧歌也夫誦諧
之為歌僅二十七字為一首言簡
意深且哉其妙處在可解不可
解之間焉白雄居士此撰解其
可解不可解之妙至矣而得拙堂
主人之增補其書初備矣今茲

何れもさくみねもさくしつれとさあもま
 びつるも自坊、えつるもあもる、山科木てま
 一葉をあらたにんりのしつ、著記しつめ
 いうもはみね、あつれをさつハス、縁の
 正し、此御記もつうん、つたつひさ
 ぶ、あもん、はし、おれ、つれ、し、け、し、ま
 あり、うま、さ、め、せ、つ、り、さ、ま、あ、い、つ、山、佛、仙、ま
 の、ま、つ、ま、い、は、い、あ、い、を、い、系、つ、つ、つ、
 又、此、あ、つ、の、あ、ま、
 申
 山、科、木、
 正、し、
 山、佛、仙、ま

凡例

- 一 此書安永選本寛政選本二品あり
- 一 安永本より寛政本より好き文あり寛政本ありて安永本よりある文あり今寛政本よりあるを参考として安永本よりある文を坊補してあり

一 寛政中より補とある以下を皆坊補也

山科木

文あり又三行の文ありふりよ
補あり一章増補あり
よる補あり二章の増補
あり四章の増補あり
又章中補あり
補あり
死の

一 従来字を平めて改くあり
魚魯鳥馬馬の漢字あり

さし引出あるを引出の元字あり
りり悉く改むあり
人ふ志あり此の字あり
有明の月鴨の長明あり
兼好法師は改むあり
とて改むあり
のまじりあり
すく同

一 是て異体のあるは作者の志あり

或人集よとちよるも 歌名とてふけい
ちり

一 各章の初る祖籍の寄るを
西風の規矩とけき其余の寄り同友
乃新吟ありて後とさるべきかの
載と又鳥碎の寄るあたる載と
たりの撰者白雄とるをのせり今増補
形して白雄及び青子流友の寄るを
のせり亦白雄と働いて一巻のせり

一 世とる門ありのるよとてあそり
その也故よ篇尾よ

世一書い祖籍の遺蹟をりやし
去来史の筆のあを流しけり
る醉居士の夜話をあきと三巻と
形して道よとるけいある同友の
あき他見をさるかとらりけり
争いをのるふとるけり同門の
おは法とるよめりて禽獸とる

そのたうあま

かゝのまじり諸あるも徳友のまじり
 是を公ませんとする所は罪を予り
 宛して且増補を加へんを上梓と
 著し出よつて西風の徳継は若くは
 くあまより推して予る罪も亦減却せん
 一 少年の人産業のひらある時を徳継を
 ねまへて徳継をたゞ多くする歎ひま
 の名をまじり且年中のひら古く

古友のまじりをも併へるまじりてり
 あまをまじりてり或もまじり月夜を
 對してみゆまじりまじりまじり
 たり又老若の隔なく徳継の助
 故に徳継をまじり徳継のまじり
 ありまじりまじり破るまじり

拙堂老人稿

俳諧寂禁目録

俳諧寂禁目録

上の巻

絶諧の亀鑑

姿情の本

三の情の本

俗情の本

詞情新古の本

換骨の本 反轉

同業の本

一丁ヲ

五丁ヲ

六丁ウ

八丁ヲ

九丁ヲ

十丁ウ

十三丁ヲ

俳諧寂禁目録

漢語訳はうゝ事

一字の意をうゝる意法源の事 廿四ウ

文字あまりの事 廿五ウ

文字をばしてゐるの優をばしてゐる事 廿六ウ

文字をあまゝしてゐるの意を
あまゝしてゐる事 廿七ウ

一句の祭事たる事 同ウ

歌題の造題の事 廿八ウ

付の事 廿九ウ

火ともあふりあふ事 卅丁ウ

漢語訳はうゝ事 卅丁ウ

和歌の言葉をばしてゐる事 卅丁ウ

古事古語古言古待ふ
はうゝ事 同ウ

名所をばしてゐる法 卅丁ウ

名所をばしてゐる事 卅五ウ

名所ふの事 卅六ウ

名所ふの事 卅七ウ

名所ふの事 卅九ウ

漢語訳はうゝ事

二

名所ふちをいへるの意を

けいふあまのいへるの意を

けいふあまのいへるの意を

廿九丁ウ

名所ふちをいへるの意を

廿丁ウ

神祇

廿三丁ウ

釋教

廿三丁ヲ

意

同ウ

旅

同

祝

廿二丁ヲ

贈答

同ウ

餞別

廿五丁ウ

留別

廿六丁ヲ

哀傷

同ウ

述懐

廿九丁ヲ

懐舊

同ウ

禹瀆

卅丁ヲ

發句の体

ききここやちかふる
そあやうあるる
ふくまきくすふる
ほそかひふるる

卅丁ウ
同
卅丁ヲ
同

名所ふちをいへるの意を

夢の巻

- 艶子やうしたる 四十二丁ウ
- 幽玄あるる 同
- おのゝきさる 同
- 色をうてるる 四十二丁ウ
- 感情あるる 同
- 観相 同
- 生熟を對も観お 同
- 自然さあさるる 同
- 一作あるる 同

回文
物の名

四十二丁
ウ

中の巻

照の事

二丁
ウ

才三の事

六丁
ウ

聯句他季うけりの事

九丁
ウ

二句一意の事

十一丁
ウ

おもひき乃事

十二丁
ウ

名所より名所附る事

十四丁
ウ

志事〜お附の事

十五丁
ウ

大勢の中の人をうこむる法

十六丁
ウ

お係を月の事

同
ウ

他の季の記短うの花撰乃事

十七丁
ウ

古今和歌集

あけるの事

十九丁ウ

恋句の事

十八丁ウ

句々々の事

十七丁ウ

聯々二々の同類属乃事

十六丁ウ

聯々諸語のあつらひ

十五丁ウ

聯々自他の事

十四丁ウ

下乃卷

こはくくひあるるの事

其一情の事

一丁ウ

才二程属の事

同ウ

才三まきくこの事

二丁ウ

才四りのふほきくこの事

三丁ウ

四時の雨

四丁ウ

四時の月

同ウ

四時の風

五丁ウ

才五尚季かけあえ事

七丁ウ

才六古時古語あふはらるる事

同ウ

才七是の文章あまきる事

八丁ウ

才八はらまきく事

九丁ウ

才九二級をく事

十丁ウ

才十思立るの事

同ウ

才十一あまきる事

十一丁ウ

才十二るるの事

十二丁ウ

才十三るるの事

十四丁ウ

才十四あまきる事

同ウ

古今和歌集

上

俳諧寂榮卷之上

七

才十五一の自他のり 十五丁ヲ
才十六共くふ意せらるるのり 十六丁ウ

禁句の事

十九丁ヲ

不易流行の事

同ウ

負外

十五の哉のり

十八丁ヲ

十五のや乃事

同九丁ヲ

これとておききるおきおのり 同十三丁ヲ

同録終

俳諧寂榮卷之上

白雄坊選著

拙堂増補

古池や蛙飛こむ水の音 翁

道のもの木櫛も馬も喰をりり

この二々々蕉門の要領也つゝめりきり

おとろひや嵩り喰あはし海苔の砂 翁

やこそ死ぬるゝもらんを標めり

身来ても来りもいりおの葉哉

花鳥集

十一

あの雪も穠けさるるなりけり翁

此秋も何う年々れをさるる翁

少もかきもなるともさるの秋尾花

四時の観相けのう歯牙の味ひて正風の
音何ぞさるる翁

補

玄音法平曰古奇と思ふる先抄をえさる
あ我義理をとりてさる義理あふ
ゆめぬう何ぞさる別さるる長
得失もあてられ教あふ一能常も又志さる
今毎う再三吟してさる義理あてさる
あ古今人の一致あふハ終るる
のう正風の音をゆへ一呂十七文さる

うゆての解さるるさるるさるる
味さるるハ妙處さるるさるる
さるる句くかさるるは難をかす人ゆえ
捨るるさるる解さるるさるるさるる
あふあふさるるさるるさるるさるる
はさるる味あふ我能れの上さるる
あささるる其得力をさるるさるる
なり申さるるさるるさるる

まもやさるるさるるさるる翁

ほさるるさるる花をさるる翁

白毛もさるるさるる翁

初さるる猿も小菘をほさるる翁

花鳥集

十一

西流子い〜んとあめりのささる
 のまき出布り〜冷〜て思暮る電燈
 去来西風の大まを同
 祖翁曰流社をよ〜る物々態
 又曰流社をよ〜るを憐む〜西の領
 とい草木のまわらぬ鳥のまを異
 る〜むや〜ぬ道り取れ乞児
 ひとり〜む〜る〜と〜念起ら
 中々別風社的一句也〜と〜句毎
 哀楽とも〜ま〜秋は〜て〜甘
 嘆〜〜〜〜〜〜〜

風西の風情也俗よ〜〜〜
 あ〜〜〜〜

補

西風の流社を〜古不易の句体にて
 子果子不朽を〜志る〜
 祖翁めも延室天和の〜異体も
 亦多〜異体〜流社〜
 一時〜風〜
 とも廢る〜の仙化曰其角流〜
 後漸三年〜
 句々〜
 中々〜
 西風〜
 句〜〜〜〜流社〜

古今和歌集卷之六

如前後の端はゆらゆらの勢や
已ら心とお合はする時をいふはむ
例の自らのたのしみは
補 例のひびき己らうらやとお合はる
時をいふはむとくは能はれぬ
彩境を志んばさるゝなりん
得

たのしみをいふはゆらや待候哉 翁

鹿のまゝよ人の教えさるゝお 一 髪

かゝのまゝよ人の教えさるゝお 一 髪

補

詩法要標云詩之義意不一要其

歸不過情与景而已情兼景者上也
偏到者次之

偏到は情のまづるは情到らば是は
此の風情のまづるは又安のまづるは景
到といふは是は此のまづるはあり

又情中寓景景中寓情あり
又云惟情可以全篇言然苟無法注之
易入流俗故曰融情於景物之中托思

於風雲之表者難之
此を眼ありありとくくくくくくありありの
を風雲といふ

谷川 也 采葉 秋の暮 益 青

今 柳 竹の末 ありゆら 涼 柳 居

くくくくくありありの風雲を志んばるゝ風情の

古今和歌集

山世

句々次の章亦ゆる

三の情の事

余情を深きうきういなり一白乃
のしあもゆるわ余情の流深きよき
ふあゆの通情ををるくよこりたを
をいやくす親の朋友の情をさるる
まのあゆのさあやのうり女のさゆのりさ
あんといははきをを情よあゆいよとい
るなりし情をあゆいこりあち巴のまの
情あして愛人なををらる情をまき
終台巻中の末より出

補

情の言かふあゆあゆのまをいよ
しさといよよいよいよいよいよ
たの涼きとらさよいよいよいよ

おもむきをのめ

枯枝ふからとのやほまらりの秋の暮 公羽

寂しき情あゆいよいよ

秋の暮あゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

寂しき余情をあゆいよ

海のかけては流のたのそく流のあ 凡 兆

あゆいよいよあゆあゆあゆあゆ

さよのさよの流の流あ柳のうけ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

源と余情をあらう

野さしをいふ風の志むるが 公卿

捨身掛命の行脚をぬりいさるるい
時の白なるありあはきききききききききき
きく人腸を断るあはきききき

秋のまゝ七日のあつの明やきた 猿 雖

ふみちあめの湯はあつあつの人種の志 鼠 弾

申くふふをこきみり秋の暮 肅 山

朝鳥の程とる人びらあはききき 和 及

こころの白くあはきききききききききき

あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき

補

あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき

補 俗情の事

俗情といふはきききききききききききき
あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき
あはきききききききききききききききき

得んとしよれこそ必死棄とあめあり
まつと射う〜〜〜河を古きよはゆる
ら〜あ〜し

中〜〜天のいあら〜〜花の
雨〜中〜水のも〜ち
千蔭

これこそ小き井の操めその風吟〜
亦そのよ〜あり〜〜〜世の
今そのをを〜〜〜古よのかさ
ア〜あ〜や〜も〜あ〜〜あ〜人〜
賞〜付よ

有用ゆ〜〜〜判の流の〜

ち〜後も依後お横〜よ〜の川
翁

十二文字のあ〜〜〜も也〜
有用のあ〜〜〜人〜
あ〜〜あ〜〜を〜〜
なる〜河〜論〜る〜

そのおあも足の折〜〜
荷分

〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜
〜〜〜〜

あ〜世もあ松も小松〜
大〜あ〜の〜あ〜

け〜あ〜の〜あ〜
何〜〜あ〜

補 とも〜〜〜
〜〜〜

〜〜

〜〜

ゆゑにすしとくまてはめりて
ぬふ又行くとぬふありき
おふつとくまてはめりて
つめはめりてぬふとくま
はりぬふとくまてはめりて

換骨乃事補反替

補換骨とて同用にして今意のかり
てあるはいつらり

あめいへる風き〜秋の風 翁
言も草々 倉い〜ゆふ秋の風 許六

次骨あり〜た〜て骨の秋の風と
あて換骨をま〜

又

埒朝の嵩くもきし奥の店 翁
あかきと猿の嵩ふ〜空の月 其角

其角曰け後反替して猫の嵩ふ〜
と〜海人の嵩白〜もあれふや乃
一俵を結く〜んぬと等言類の疑ゆめ
ある〜は〜一ふの由をほす ありき
味ひあさつむる〜

補 徐陵鴛鴦賦曰

山雞映水那相得 孤鸞照鏡不成雙
天下莫成長會合 無勝比翼兩鴛鴦

山雞映水那相得 孤鸞照鏡不成雙
天下莫成長會合 無勝比翼兩鴛鴦

黄魯直題畫睡鴨曰

山雞照影空自愛 孤鸞舞鏡不成雙
天下真成長會合 兩鳥相倚睡秋江

又

鬢為愁先白 顏因酒斲紅 樂天
短髮愁催白 衰顏酒借紅 右山

こころを換骨の待たしなり

ほろこきよ時つるからぬふもとき
まきありゆの月そのころの夜

後徳寺志大臣

右の月とあはれはとまきよ
たしむるまのけいもえむ

宇治前大政大臣

こころを換骨あくる歌あり

又

人の親めかよほひりり雀のみ 鬼貫
雀よ成るあひりり人の親 大馬

こころを換骨あくる体と

人の親の焼野の雀よあひりり 曉臺

是をたの鬼費るるより及持たし
きしる作みく換骨ともかこころ

補 同業の事

いづもけさあきののさそをぬり

吟さるるけさあきののさそをぬり
風の病こそ切さるるけさあきののさそをぬり
あきさるるけさあきののさそをぬり

月夜や あやえ菊や
こさるるの文らまのかりをきこいよ
月夜や 菊やあやえ

かこりよさるる言さるるあきさるる
小はよたせさるるけさあきののさそをぬり
連続して三三の字あかりをきこいよ
二四の字あかりをきこいよ
字あかりはさるるけさあきののさそをぬり

補

二四の文字あかりとさ

いづもけさあきののさそをぬり 翁

あきさるるけさあきののさそをぬり 吞霞

三三の文字あかりとさ

あきさるるけさあきののさそをぬり 傘下

あきさるるけさあきののさそをぬり 自槐

古人のまらるる二四の字をぬり
あきさるるけさあきののさそをぬり
下あきさるるけさあきののさそをぬり

文字をあかりて句の優をけさるる

あきさるるけさあきののさそをぬり 翁

まじりくは嵐のなまめしき声にきこゆ
山嵐雪

鳴りし鳥とありてはさうのさうありて
感傷しあはくはけの懐棹の今も
残りぬと嘆秋の吟ふるあはれを

くもは降りしあはれをさうに
このくもはあはれをさうに

くもは降りしあはれをさうに

一句の禁さすいぬるあり

朝な夕なを松島のかげに
翁

松島行脚をたしむるありて
風神の情懐中をたしむるありて

まじりくは嵐のなまめしき声にきこゆ

まじりくは嵐のなまめしき声にきこゆ
山嵐雪

越人へ挨拶の白なり
さしめより女部志の女といふ

鶯の鶯といふさうありて
残りぬと嘆秋の吟ふるあはれを

まじりくは嵐のなまめしき声にきこゆ

歌題他諧題の事

補 歌題とて歌よは他詠よは
つらあり他詠詠といふ他詠よは

まじりくは嵐のなまめしき声にきこゆ

付乃事

蝸牛角ふとワキよ須广ぬ石 翁

補 世のつらさい見るといふもよひのこゝろ
とふちあり揚子の角の上より雲といふ
回籠といふ玉ありてたふは争ひを
たふすや廿壯ふりてふりけ偶言や
ぐりーのたふしむ

以のちとまきて野さの鏡哉 工迪

補 雄畧天皇の法意のせうとてえさるを
半らふとせめり野さるるをうらむ
やささるるやや 付あふ人

郊をむわつけは地のは初のか茂端 其角

補 うのちのめいさるるはあひかとなり
くのちさるるをえく清女のあひさるる
やさるか茂端のかくさるる郊のち車
をあひ人あひさるる
軍書曰その結して古代のるるを思ひ
あえさるるなりからり人の名を向中
あひさるるさるる對さるるさるるあひ
せあさるるあり

義仲のち株さるの山を秋(虫) 公羽

こまひうち山さるるのちさるる

補 祖翁より景清も花見のちあめ七さる
といふ向あまは是と延実天和の
流るるあまのちさるる用ひる心んさる
貞真のち元禄もさるる貞真の元禄の

吟ふをかくして流石めき申さるるなり候し
却て延宝とて和の吟よめら西余のら
亦申し多く候なり

補火を由水子いふ事

清補る勇気おし御能く火を由あり
ゆゑありとてさるるなり火を由あり
ゆゑありゆゑありゆゑありゆゑあり
ゆゑありゆゑありゆゑありゆゑあり
ゆゑありゆゑありゆゑありゆゑあり
ゆゑありゆゑありゆゑありゆゑあり
ゆゑありゆゑありゆゑありゆゑあり
ゆゑありゆゑありゆゑありゆゑあり

蛇吟ふときけいおし雑多の声 公翁

かなりか蛇吟をめりてさるるなり
支考

是をあら火をあらゆゑいなり
おのちおあるなり

嘆うえてゆゑ久しき御縁を
あつたる花とてゆゑいなり

これらも同様の事あり

白雄曰火をあらゆゑいなり
一語をゆゑ縁をあらゆゑいなり
ゆゑいなりゆゑいなりゆゑいなり

漢語をけし事

馬より身を残す所達し茶の糞 公翁

小舟の中山の吟あり

吟あり

上

吟あり

杜鵑啼也湖多のこゝ酒至 丈草

好きてせよとりのあめをあはれとて残る
湖多の歌は皆漢語のゆへに正風あは
る花燭半涼夜なるもはくあり
元日 灌佛 名月 蠟八 寒食
こまごとの歌のつらきも漢語あり

補 蝶 葉

これららるる古の詞にあはれとて
和歌若流もて入まきくと漢語ゆへ
利あるは他はもやうのりちのる
あり

名月也游々ふりくみ七小町 翁

順禮よりちたをいひぬるは 嵐雪

一舟のうちよあはれとて
あはれとてあはれとて

和歌の言をよをけし事

紙まぬのぬるもあはれ雨の花 翁

袖よりけりあはれ月いづり 素堂

先づいひて言をよをて
月けれとてあはれ
あはれとてあはれとて
あはれとてあはれとて
あはれとてあはれとて
あはれとてあはれとて

そのあはれとてあはれとてあはれとて

和歌のうゑふ葉のほのぼのふ葉のや
ふらふらなましこの日の下のふ葉の
なかりのくもふあしをわのほのぼの
へうへう

りやうりもほのくこほじ柿お葉 貞徳

ふらふらふらふらふらふらふらふらふら
古の流りぬるふらふらふらふらふら

眠や世をわいぬの山かきさ 春嶋

ふらふらふらふらふらふらふらふら

古事古語古歌古詩あつらふれさる白法

知足軒新居の賀

ふらふらふらふらふらふらふらふら 翁

淮南子説林云

大厦成而燕雀相賀

ふらふらふらふらふらふらふらふら

撰集抄云中勢元輔翁の哥二首ふ
きふらふらふらふらふらふらふら
このふらふらの扇のふらふらふらふら
ふらふらのふらふらふらふらふらふら
ふらふらのふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふら

和歌のうゑふ

和歌のうゑふ

あつちやう日はきなくも秋の風 翁

明詩選

秋風吹將暮 古道行人稀

登此微陽色 射我霜中衣

石ゆしや言者門あきそ夕々矣 牡年

源氏常其の美さ

あつちやう川のついでにさうりそのを
あきへあそびてしすのうらと云

以しゆと鮎の魚あり

春もつやうの雀の顔けさ 一髪

清女枕草紙

をうまの顔つきいさうらうらうと云

青海や羽白ま鴨赤か 経 忠知

古依日記

くろくさこの松糸をぬきゆきと云
名をまきく松のうらまきと云
波をまきのうらまきのうらまきと云
お似くま色うらまきと云

えくつちやう鳥のまきと云 其角

古今集

あつちやうのうらまきと云

けきるまふ塚の庭を那うにしま 公羽
吟はすもやあまの白ひの捨るの 岱水
ほりれを越の友人を舞ひてむ 素牛

こころをいひあそぶをまじるゝをりり
所よまじりて名所の白あそぶを
あそぶ必あひあそぶをいひ舞ひ
古物等の白くを考ふるあそぶにあり
て是等の白をいひ出でるゝをりり
なり
古人曰く海そのひくすもあそぶ
すゝぬ人宮治川の螢燈をのびり
ゆきりり出たりんあそぶはめぬ
あそぶはめぬ

ひまは近江の人とみりきり 公羽

補 携甚集云望湖水惜春とそそあり
あり或はあそび送別とそそあり
一時の程ありあり後世の人を
惑はす一盲衆首を引の四瀬舞を
たしあそぶはめぬとそそあり
こころをいひあそぶはめぬ

五月あふみの浮るをいひりむ 公羽
と并きの門たしあそぶはめぬ

あそぶはめぬ網代の氷魚を考ふる
出さん

八
七
六

ふらふらりも軍あは出せり野山 主考

ひきうりりり名名あり難りうりりあらん
あらまらるる中一は夫りをこむる秋
あそ句中一はさひし自然と終たよ
かうしーいーをこのまてこるるゆめ
あしーまらるるもいし中まらるる

補ていふりりて句のまをゆくするなり

ゆらゆらふたふたしあふり
あふりあふりあふりあふりあふり
のまらるるるるるる

そらふらぬはもあふりあふりあふり 公利

あふりあふりあふりあふりあふり

文君のれきも酔のすた
あふりあふりあふりあふり

酒初るり秋のまらるるあふり 惟然

あふりあふりあふりあふり

ちねとあふりあふりあふり 越人

去来田園集の一体の句としていひあふり
あふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふり

其の罪をみんてそ人を悪あふり

あふりあふりあふり

あふりあふりあふり

ちんさく西よめを伐るる言
東よめは院くの鏡の色
をららの底よここゝ入寒空
鏡石とりの句をいせ

高取の城の空をよこし山

其角

うしやう山の吹あり

救世大士を母のそとを
勾欄を寄るふかむらゝ寛
形る古のあそびのそとむら
山みりし風のそとあつめ
梵字をよめとて樹をみる
ゆくゆくそとて鏡の書
をぬるそとて鏡の書
つゆのゆくはらうとて

ゆきをそとてあつめ
石條の地たるそとて

新樹源く大親まきのつゆのそと

白雄

初瀬の吟たつあま

初瀬の吟たつあまの細き許六の風俗文選
を熟読せんとしそとてのそとあつめ
虚よあそびのそとをそとて文飾
よとてそとて虚よあそびのそと
中の俗言辭をそとて文選
初瀬の吟たつあまのそと
又そとてそとて初瀬の吟
そとてそとて初瀬の吟
そとてそとて初瀬の吟

初瀬の吟

上

三

神祇
三十一

神祇

多うとらの皆やあめは遷宮 公翁

梅つや湯とこの流の春のまき 文草

昔海苔も和光の唐のむらび 許六

他流よつとふ五音連声等ののり風
けつと細さうーとけきさうをさふ
あーたさう

香清ー^死ぬきさ

梅つもの色^鏡今おと

ふこの類い神祇ま納のこたうと

畢旦音管の吟吟けら後ゆたの
ま納まあうとあ神祇まをまは

釋教

親まの燕丸えやうたの雲 公翁

おあはしもむのくもは山哉 般木貞

法然上人五百奉忌

ひん代まや一板の法のみと 露路法

ま納まあうとあ神祇まをまは
けつと細さうをさふ
あーたさう

三十一

意

紅梅也えぬ意けし玉公廉 翁
秋ひしそ吹く粒をりきて舞ぬ夜 荷分
虫居の月より枕ももり哉 文洞

あつたはしとくはあまきとく
歌のよき歌詠あまきとく
自のあもよりえとて詠詠
細しきとれふあつたはしとく
あつたはしとくあつたはしとく

旅

離るる脱てりしるお負ひぬ衣 翁

草はくくらそ母うら大時回をむ 山川

その魅お推さるありてあききき 文草

旅中のみとあつたはしとく
とくとちんをりあつたはしとく

祝

先程く梅をんのみまのまを 公相

駒を拜願せし人へ

時よし肥ゆる馬より秋まを 酒堂

其の角より新宅あり

世もかきとるにちよよくの月 涼菟

心はしとくあつたはしとく

心はしとくあつたはしとく

心はしとくあつたはしとく

みづの日記をよみてたうと

君えよやふまいつる花葉の桶 嵐雪

務さの白む自他親疎をこそさすしほ

餞別

頼のふふふとまを流田の裏 翁

霜の首途をみくる

公相根の志くまふ日をたひより 由之

友なる孤をたこさる

雲をあやまらしむゆゆ 野坡

綾糸の白自他親疎をたすまふ

留別

川崎あそくよつと

ちまの穂をちくふけむ別をけ 公羽

ちまをくくた日

思ひまらふ静の秋をくく日た 素心堂

途中あそく別をたす

静の秋をくく日た

素心堂

素心堂

行くとききくまはまよふ秋のふ 曾良
留別の句む自他我縁をいさかきまへ

哀傷

門人嵐園の死すうらみ

秋風の折るかみしき幸ぬの杖 公羽

其の角々母をりしうらみ

郊のむよそく形さる宿をすれし

公羽のことのうらみ

ゆるりもたうらみふちりぬみまの菴 槐市

ちくちくも膝をかへてふふらみま 野坡

公羽の送茶房

南さかへぬまよふかきや枯尾屯 其角

翁の死はのらむまへしや
昔のまよふしやうらみ

かみよるもまよふおの眼うれ 北枝

母とこころしなうらみ

身よりとまよふまよふれ所月哉 其角

公羽の死

北

其角

妻もよりのつらさ

水も月の相のひびきもよりのつらさ 野水

あつたつたつたつた

州と歌のあつたつたつたつた 落枯

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 尚白

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 去来

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 史邦

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 鬼貫

追悼

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた 許六

あつたつたつたつたつた

三

六

舟の年回し

花のうけしるる花のうけ 其角

ななる工齋のこ圃をり
こころも葉をくまひりて

三人の春ふさくとあふの風

三洞のこたふひいふ中を
お目せうか恨もくも葉を
まひりて

志しぬ人の志し借いしを雪の下 元翠

哀傷の向む自他秋味を日さすへ
脱務各族を留別哀傷とて人

おしりつ小句をなす人句ひつら
るるあまをわらひ

精つ代も涙あめを春乃精

かこつとららこよを人を精りて
精ともおも涙あめよその風

おくつとららこよを人を精りて
や別れりこの舊門のゆへにおのこ
るお通しをわらひ

迷懐

花のうけしるる花のうけ 其角

花のうけしるる花のうけ 八橋

葉かきとてらんも朝鳥の浮世は

野坡

懐舊

高館の古戦場あり

夏草や兵少もく夢人の心

三尾

扇の経多ひく庵の雨もあま

いこもと軒も鍋洗ひく心もこれ

曲翠

母を夢とくらく

まきのまをゆじいまの乳房は

風洗

画讚

穀曾の画あり

稻けりや教のよき稲の穂

翁

源氏の画あり

傘持の月よみくくはあこの好

其角

花女の繪あり

よのかく心もよてみるを園の月

鬼貫

布袋の画あり

大虚涼く禪師の指のこく所

其角

大虚涼く禪師の指のこく所

土

四

人麿の繪り

月夜の鏡なるまじり海とそ人 才磨

備ハ他の句よりいへるなり

ふみのとそくは狂いそこのを

其の角の句を何ういへばよ東坡の鏡と
あせり自のるありていふて澄たるる
笠重是天雪といふ語をそと轉の
句よりいへる角のころりかたて澄し
あ~~~~

又か~~~~の 澄り

あのやうな甚の極いかにし

ふ~~~~をいへるもの~~~~あのやうな

つらきやうな~~~~いかに~~~~の澄たる
ふ~~~~とそ甚門のゆ~~~~詩ハ有聲の
出画をそ聲の待るり~~~~古人の言
なり故に澄るるを画の餘情をいへ
~~~~

音海やを鼓ゆるゆる春の色 素堂

つらきやうな~~~~いかに~~~~の澄たる 公羽

きかぬ桐のひと~~~~や葉のさり 其角

此今を鼓葉の三幅對の澄なるを  
等ふふのひと~~~~

補 或人枯木は鳥の~~~~画は秋  
の~~~~をいへる~~~~

~~~~  
~~~~

老翁如くいれさるる由人亦秋の暮 白雄

幾發句の体をとらぬ句

きしきよあなうらるる句

それの雪待ふよめる浅きを 公羽

うらくともて待圍らる禁哉 去来

志しうくくをあそぶる出陣あれ 沾蓬

とらぬやうなる

汐哉や鶴睡ぬきそ海涼し 公羽

名月やあそぶ人亦松のか針 其角

来るの喧しく鶯のひくまは 桃賀

ふしきくきくゆきさる

杜宇大にぞくぬけり亦月夜 翁

湖老のあそぶさうらるる月あ 去来

若くはうらたあく申ふおのほし 杉風

あそぶくか〜い半るる

さしきいふあそぶたやのあおの尾 公羽

いとあそぶ又うらるる日影うら 露沾

けさあそぶあそぶ入掃くそきまもと 丈草

艶々たる句

ぬきとてゆく人おぬしわぶの秋 公羽

蜀魄おんをたふとて夜はきを 菊齡

翠うらやまひのささくよるのまね 支考

幽玄なる句

秋の木の葉はゆきまふいふ歌 公羽

おとつして知の心はむいふ歌 山川

名月也新とて寺の葉の木の 昌房

秋の句

初生の葉たてめとて人輪あやせん 公羽

おとつて花はる人乃長刀 去来

黄の鶴也二羽五合の最年首 曲翠

色もあつめる句

卯のむやうとて柳のぬかひはし 公羽

身おとつていよまの間の緑のれ 轍士

ささく浪やゆきけし揚り下りち 塵生

感情なる句

酒のさへいよとて春のさけおのを 公羽

ひし毎おゆ掃のまふおふたりのおたの  
ほくくおと繪をもつる秋の翁  
小春

観相

首の紫の表えきり今秋の表  
急きもむらうをたると木節  
何となく地をさふさうの表也  
越人

生頼の対を観お

飛ぶつてをうとつふ持ふ  
矢のつら母の乳をのこ鹿のふか  
立志

炉をえくふ命はをほ措の儀 似草

身とてつるの事する

春のおろ梅よ明く志すいりの 翁  
較るく病ふ舞の涼指かふる也 其角  
おとつて常の教るとあふふ亮 不角

又

灌仏の日お春はをまふ兼のまふ 翁  
虫もや猫の爪く周果経 西吟  
盗人の後なくそこの中くか 来山

又

よりそのくちやきりねき時の繪がまきひ  
たつきくや女その紙の枚の色 鷺水  
かきくねの橋や繪入の百人一首 許六

又

艦の舟溜をうつて揚氷の灰や泪 公羽  
ふみ代さふ深葉い蓮風情さくえ 素堂  
さめい山の灰とけくさるるをねらむ 揚水

一作ある句

床より扇を舞ふいもやまきくさ 翁

馬をうる聲も枯舟のあはし哉 曲翠

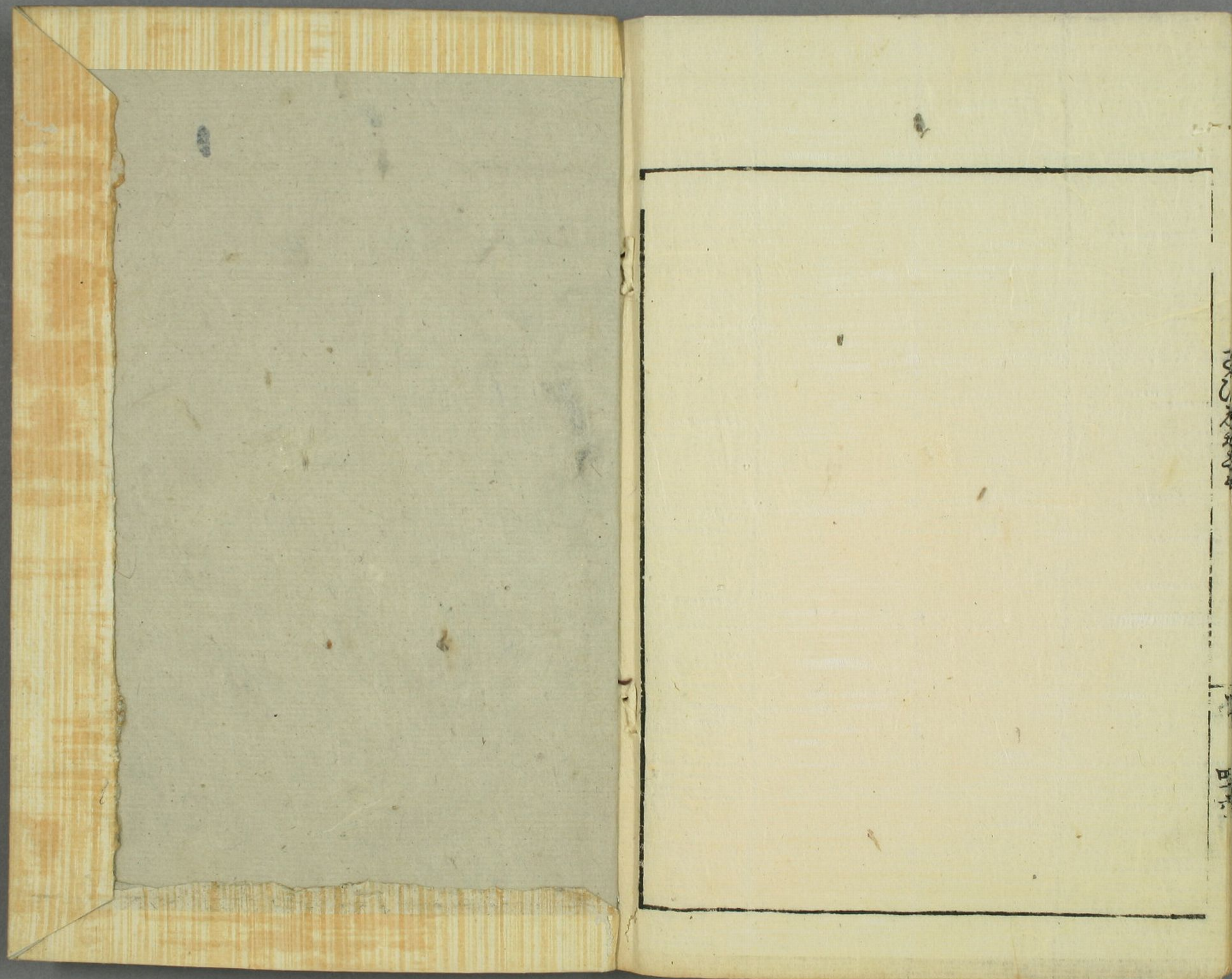
とそえきんで紙幅をたぐる芒草 荷分

くまきくさの句くさを俵 慈くわの句くさ  
りとも皆ありしめいさるあふしうさるう  
古人曰一律しあふしうさるあふしうさるう  
りのくさのくさくさくさのくさくさくさ  
ひあ情をさるうさるうさるうさるうさるう  
句くさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさくさくさ

回文

上 五十五





每册  
福地康重